

「口の難病」セミナーのご案内

日時： 4月17日(金)17時～19時

場所： D棟4階大講義室

講師： Prof. Robert Friedland

(Department of Neurology, University of Louisville, KY, USA) 他6名

演題： *Streptococcus mutans* and systemic diseases 2015

-Cutting-edge knowledge and future perspectives-

要旨： 本セミナーは Dr. Friedland による基調講演 “The role of the oral, nasal and intestinal microbiota in neurodegenerative disorders and cerebrovascular disease” に続き、

以下の先生方による最新のデータのプレゼンテーションとディスカッションを行います。

なお、本セミナーは全て英語で行われます。

Dr. Yutaka Sato (Tokyo Dental College)

Dr. Ryota Nomura (Osaka University Graduate School of Dentistry)

Dr. Tokutaro Tanaka (Seirei Hamamatsu General Hospital)

Dr. Shuichi Tonomura (National Cardiovascular Center)

Dr. Nagato Kuriyama (Kyoto Prefectural University School of Medicine)

Dr. Taro Misaki (Seirei Hamamatsu General Hospital)

※本セミナーは大学院セミナーを兼ねます。

問い合わせ先：(小児歯科学教室・2961)

「口の難病」セミナーのご案内

日時: 2015年 5月25日(月)午後5時～7時(質疑応答時間あり)

場所: 記念会館2F多目的ホール

講師: 新谷 歩 先生

大阪大学臨床統計疫学寄附講座教授

医学部附属病院未来医療開発部データセンター長

演題: (第1部) 今日から使える医療統計学

医学論文を紐解くための統計コンセプト

(第2部) 電子データ集積システムREDCap紹介

要旨:

第1部: 臨床研究を行う際、あるいは論文等を読む際、統計学の知識を持つことは必須です。本講演では、記述統計量、仮説検定とP値、無料ソフトを用いた症例数計算、リスク比、オッズ比、感度・特異度、無作為割り付け比較試験と観察研究における統計解析、交絡と回帰分析など、統計学が敬遠される一因となっている数式をなるべく使わない形で、論文などに多用される統計、医歯学研究者が陥りがちなポイントとそれに対する考え方について紹介します。

第2部: 2015年4月に施行された「人を対象とする医学系研究統合指針」では、質の高い臨床研究の推進、それにともない各研究施設でのインフラ整備が義務付けられることになりました。国際的な競争力を高めるためにも安価で質の高いデータ集積システムの導入が必要不可欠となりつつあります。阪大医学部では、統合指針への対応策の一つとして、世界アカデミア標準となったデータ集積管理システム、REDCap(Research Electric Data Capture)を導入しその運用をデータセンターでサポートしています。REDCapはIT専門家でなくとも簡単にWeb上でデータベースの構築と管理ができ、多施設のデータを簡単安全に集積できる画期的なシステムとして、世界88か国20万人のアカデミックユーザーに活用されています。REDCapシステムについて、簡単な概要と実際の画面構築データ入力などその使い方、統合指針への対応のための運用方法などを紹介します。



略歴

新谷 歩(しんたに あゆみ)

現職:

大阪大学 大学院医学系研究科
臨床統計疫学寄附講座教授
医学部附属病院未来医療開発部
データセンター長

東海大学客員教授

福島県立医大客員教授

京都大学非常勤講師、

2007年～2013年

Vanderbilt大学医療統計学部准教授

2001年～2007年

Vanderbilt大学医療統計学部助教授

2000年 米国Yale大学博士課程修了

1996年 米国Yale大学修士課程修了

1991年 奈良女子大数学科卒

※大学院特別講義も兼ねます

(問い合わせ先: 歯科補綴学第一教室・石垣・内線2946)

「口の難病」セミナーのご案内



日時: 2015年 7月 7日(火)午後4時～6時(質疑応答時間あり)

場所: 記念会館2F多目的ホール

講師: Dr. Charles R. Carlson, Ph.D., ABPP

演題: “Biobehavioral Issues in the Management of Orofacial Pain: Patient Characteristics and Cognitive-Behavioral Interventions for Use in Dental Settings”

要旨: The overall objective of the proposed program is to provide practical guidelines from a clinical health psychology perspective for dentists providing professional services to those with chronic orofacial pain conditions.

Specific Objectives

1. Describe the biobehavioral features of chronic orofacial pain and specific strategies available to health providers to address issues that may contribute to the onset and maintenance of such pain.
2. Discuss the principles associated with the development of comprehensive, multidisciplinary treatment protocols for orofacial pain conditions and strategies for the referral of patients with orofacial pains to colleagues in the health professions.
3. Summarize the data supporting the use of cognitive-behavioral self-regulation skills training procedures in the management of orofacial pain conditions.

This presentation will provide the dental clinician with a review of biobehavioral issues influencing the course and treatment of chronic orofacial pains. Topics include recent scientific advances, unique features of orofacial pain, effects of exposure to psychological trauma, influence of personality structure, and scientifically-based cognitive behavioral treatment strategies. The role of cognitive-behavioral self-regulation skills training will be particularly highlighted. Throughout the presentation an emphasis will be placed on the function of the dental clinician who is sensitive to biobehavioral issues in evaluation, treatment planning, and service delivery for orofacial pain patients.



Prof. Charles Carlson is a clinical psychologist at the Orofacial Pain Center, University of Kentucky, Frankfort and Lexington, KY. July, 1988 to present. Wheaton, IL, August, 1984 to July, 1988. He has been specializing in behavioral medicine and health psychology. Areas of interest include muscle tension, stress/anxiety disorders, chronic pain and psychophysiological disorders.

※本セミナーは大学院特別講義も兼ねます(問い合わせ先: 歯科補綴学第一教室・石垣・内線2946)

大学院特別講義のご案内

日時: 2015年7月7日 17:15～18:45

場所: D棟4階 大講義室

講師: 小宮山 彌太郎

(ブローネマルク・オッセオインテグレーション・センター長)

演題: ブローネマルク教授とオッセオインテグレーション

要旨: 今日のオッセオインテグレーション・タイプのインプラントのパイオニアである、ブローネマルク教授が臨床応用から50年の節目を見届けることなく、年末に逝去された。これまでは、あまり知られることがなかった教授にまつわる事柄に触れ、在りし日の教授を偲んでみたい。

(問い合わせ先: 有床義歯補綴学・高齢者歯科学分野 内線: 2954)

※「口の難病」セミナーも兼ねます

「口の難病」セミナーのご案内

- ◆ 日時：2017年7月7日(火) 17:00～18:30
- ◆ 場所：歯学研究科 D棟4階 第2講義室
- ◆ 講師：Prof. Sven KREIBORG
Professor of Copenhagen University
Invited Professor of Osaka University
- ◆ 演題：Craniofacial morphology and growth in Apert syndrome. Dental and orthodontic perspectives
- ◆ 要旨：Apert症候群は常染色体優性遺伝に基づく先天性疾患で、その症状は冠状縫合の早期閉鎖による頭蓋顔面の異常に代表されます。本講演では、このApert症候群について、豊富な症例を三次元画像で紹介し、症状に対する歯科・矯正学的なアプローチについてお話しする予定です。

※本セミナーは大学院特別講義を兼ねます。

問い合わせ先(放射線学教室・2968)

口の難病セミナーのご案内

- 日時： 平成27年7月14日(火) 17時00分～18時30分
- 場所： 大阪大学歯学研究科 F棟5階 弓倉記念ホール
- 講師： Richard Peters Darveau
Univ. of Washington Dental School,
PROFESSOR AND CHAIRMAN DEPARTMENT OF PERIODONTICS
- 演題：” Periodontal Health is just as complicated as Disease”
- 要旨： Periodontal health, similar to periodontal disease is associated with an oral microbial community. Although there are strong associations between the microbial compositions of the oral microbial communities associated with either health or disease little is known concerning how the composition of these different microbial communities affects the periodontium. In this presentation I will present how we have identified *Porphyromonas gingivalis* as a “keystone” pathogen which orchestrates a dysbiotic oral community to induce inflammation and alveolar bone loss. Furthermore, I will describe how oral microbial communities associated with health contribute to healthy periodontal homeostasis. Specifically, I will describe lipopolysaccharide modifications which occur during co-culture of oral bacteria which influence TLR4 activation and how the periodontal host response in health is highly specific in both location and neutrophil chemokine expression.

※大学院特別講義を兼ねております。教職員、大学院生など多数のご参加をお持ちしています。

問い合わせ先：(歯科保存学教室：野杣(内 2928))

「口の難病」セミナーのご案内

- ◆ 日時：2017年7月14日（火）17:00～18:30
- ◆ 場所：歯学研究科 D棟4F 大講義室
- ◆ 講師：Prof. Sven KREIBORG
Professor of Copenhagen University
Invited Professor of Osaka University
- ◆ 演題：2D and 3D imaging in the study of normal and abnormal craniofacial development
- ◆ 要旨：頭蓋顔面の内部構造を含めた三次元的な発育成長の過程は、個体を縦断的に調査した研究がほとんどないために、よく知られていません。本講演では、デンマーク王国での三次元MRIを用いた小児の縦断的な研究の結果に基づき、頭蓋顔面の内部構造を含めた三次元的な発育成長についてお話する予定です。

※本セミナーは大学院特別講義を兼ねます。

問い合わせ先（放射線学教室・2968）

「口の難病」セミナーのご案内

場所

口腔科学研究棟5F
弓倉記念ホール

Program

16:30～17:00

講演

「咀嚼・嚥下の機能評価」

山本 雅章 助教

(大阪大学大学院歯学研究科 有床義歯補綴学・高齢者歯科学分野)

口腔状態は、疾患や加齢によって変化する。結果として機能障害が生じ、患者のQOLに大きく影響を及ぼす。その機能障害をいかに評価し、歯科治療の中で反映できるかが良好な結果を得るために重要である。今回は咀嚼・嚥下の機能評価の中から、実際臨床応用されているものについて症例を交えて紹介する。

17:00～18:00

講演

「嚥下運動誘発の調節機構」

井上 誠 教授

(新潟大学大学院医歯学総合研究科 摂食・嚥下リハビリテーション学分野)

嚥下運動は反射性にも随意性にも誘発可能であり、一旦開始された嚥下は脳幹のパターン発生器と呼ばれる神経集団が活性化することによって多くの筋活動が認められるという点において、生体内で最も複雑な神経機構をもつ運動のひとつと言われる。今回は、摂食嚥下機能に関わる基礎研究の中から、臨床応用への期待がもたれるいくつかの生理実験をピックアップして紹介する。

※大学院特別講義を兼ねております。

平成27年

9/18金

[16:30～18:00]

お問い合わせ:「口の難病」プロジェクト(内線:2704)

「口の難病」セミナーのご案内

- ◆ 日時：2015年10月6日（火） 17:15～18:45
- ◆ 場所：D棟3階 示説室
- ◆ 講師：水口 俊介 教授 （東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科 高齢者歯科学分野）
- ◆ 演題：超高齢社会における歯科としての備え ―東京医科歯科大学高齢者歯科学分野の戦略―
- ◆ 要旨：平成26年4月の人口推計によると65歳以上の高齢者の人口は3189万8000人となり、初めて総人口の25%を超えた。また、国立社会保障・人口問題研究所（www.ipss.go.jp）では、この高齢者人口割合は、平成42年は32%、平成72年には39.9%まで上昇を続けると推計されている。この『超高齢社会』において我々歯科医師はどのように立ち回ればよいのだろうか。

高齢者の歯科治療に際しては多くの問題が内在しており、特に有病高齢者に対し安全な歯科治療を行うための方策と、医科との連携が必須となる。また、摂食・嚥下障害をもつ要介護高齢者も増加しており、この機能評価を適切に行える歯科医師が今後必要とされるであろう。また、高齢者は義歯使用率も高く、特に長期間の義歯使用は高度の顎堤吸収をうみ、また唾液分泌量低下等によりいわゆる難症例が多くなっていることも近年の特徴の一つである。

2013年度に東京医科歯科大学は、高齢者歯科学分野と全部床義歯補綴学分野を再統合した。いうまでもなく、今後増加するであろう高齢者歯科関係の様々な要求に、スピードとパワーを持って対応するためである。

本講演では、東京医科歯科大学高齢者歯科学分野の活動、すなわち高齢者の歯科治療における全身管理、義歯ケア、高齢社会へ対応した義歯用材料、咀嚼能力評価、全部床義歯治療に貢献する要因、CAD/CAM全部床義歯、IOD、摂食嚥下機能評価について紹介させていただき皆様のご批判を仰ぎたい。

（問い合わせ先：有床義歯補綴学・高齢者歯科学分野 内線：2954）

※大学院特別講義も兼ねます

大学院特別講義のご案内

日時：平成 27年 11月 5日（木）午後 5時30分～午後 7時00分

場所：F棟 5階 弓倉記念ホール

講師：山崎和久教授(新潟大学大学院医歯学総合研究科口腔保健学分野)

演題：口腔細菌が全身に及ぼす影響を考える

要旨：近年、口腔細菌叢のバランスの乱れ (dysbiosis) によって引き起こされる歯周病が糖尿病、動脈硬化性疾患など、様々な疾患のリスクを高めることが主として疫学研究により明らかになってきた。

歯周疾患とそれら疾患に共通の疾患感受性、共通のリスク因子が存在する可能性は否定できないが、因果関係を説明するメカニズムとして菌血症、炎症性サイトカイン、分子相同性にに基づく自己免疫応答などが提唱されている。しかしながらこれらのメカニズムを支持する直接的な証拠は乏しい。

一方、歯周病が関連すると報告されている疾患の多くはまた、腸内細菌叢のdysbiosisとも関連するという報告が蓄積されている。腸内は常在細菌叢のreservoirであり、腸内細菌はビタミンやタンパクを合成するとともに食物の消化・吸収を助けている。また、有害細菌の増殖を阻止するとともに腸管免疫の調節を介して全身の免疫応答にも関与する。腸内細菌のバランスが崩れ、有害菌が増加するとそれらの細菌によって生成される腐敗産物、細菌毒素、発がん物質などの有害物質は腸管自体を直接傷害するのみならず、バリア機能の低下した腸上皮間隙から体内に吸収され、肝臓、心臓、腎臓、膵臓、血管などの様々な組織に障害を与える。

我々は、代表的な歯周病原細菌である *Porphyromonas gingivalis* をマウス口腔内から継続投与すると血中炎症マーカーの上昇や脂肪組織、肝臓において炎症性の変化が誘導されることを見いだした。興味深いことに血中からは投与した細菌は検出されず、歯肉の炎症もきわめて軽微であった。さらに、これら全身的な炎症が腸内細菌叢の変化と腸管バリア機能の低下による菌血症が原因と考えられるデータを得た。これらのことから我々は歯周病など口腔内のdysbiosisが起こっている場合、飲み込まれた口腔細菌により腸内細菌叢が変化し、肥満などで見られる代謝性菌血症と似た状況が作り出される、あるいは腸管免疫に作用して自己免疫応答を亢進させる結果、様々な疾患リスクを高めるのではないかと推察している。

問い合わせ先：（口腔治療学講座・内線2932）本セミナーは口の難病セミナーを兼ねております。

大学院特別講義のご案内

日時: 2016年11月9日(月) 17:30～19:00(質疑応答時間あり)

場所: 大阪大学大学院医学系研究科附属共同研究実習センター7階会議室

(本特別講義は、大阪大学医学部附属病院疼痛医療センター主催 第12回学術セミナーとして開催されます。)

講師: 石垣 尚一 先生

(大阪大学歯学部附属病院口腔補綴科 講師)

演題: “Will today’s physical activity and sleep/arousal state affect tomorrow’s chronic pain intensity?” A brief introduction of the methodology and preliminary results.”

われわれの診療科には、「顎関節症・口腔顔面痛専門外来」が設置されており、口腔顔面領域のさまざまな慢性痛を有する患者の診察にあたっている。いわゆる顎関節症とは、顎関節や咀嚼筋の疼痛、関節(雑)音、開口障害あるいは顎運動異常を主要症候とする障害の包括的診断名である。その病態は咀嚼筋痛障害、顎関節痛障害、顎関節円板障害および変形性顎関節症であるが、約2/3に咀嚼筋の慢性痛を認める。さらに、頭部、頸肩部、および腰背部の慢性痛を伴うことが多いことから、中枢性過敏も生じていることが疑われる。

このような慢性の痛みは、睡眠の質を低下させると考えられてきたが、睡眠障害が疼痛閾値を低下させ、疼痛の慢性化や重篤化を招いているという仮説も提示されている。ただし、これらは横断的な研究結果によるものであり、因果関係を示唆したものではなかった。

一方、このような慢性痛には日内あるいは日間変動が見られることが多いため、前向きな解析を行うことができれば、睡眠状態と慢性痛との関係をより明確にできると思われる。

そこで、14日間にわたり連続して測定したデータを用い、ある1日の身体活動状態や睡眠・覚醒状態が、その翌日の慢性痛の強度に及ぼす影響を、線形混合効果モデル(Linear Mixed Effect Model)を用いて解析を試みた。本解析手法は、日々の変動を伴うさまざまな疾患データの解析にも有用と思われることから、本講演では、この統計解析手法および解析結果の一部について提示させていただきたい。

講師: 杉村 光隆 先生

(大阪大学大学院歯学研究科高次脳口腔機能学講座 准教授)

演題: 「歯科における難治性疼痛の臨床と研究 ― 痛みと女性ホルモン ―」

口腔顔面領域の痛みは、睡眠や食生活、会話など日常生活を阻害し、患者の心身両面に与える影響は決して小さくない。また、その領域の痛覚が更年期においては変化すると言われており、我々の歯科麻酔科ペインクリニック外来でも中高年の女性患者の割合が高く、その中に不定愁訴や情緒不安定など自律神経失調状態の更年期患者も含まれる。

国際疼痛学会の痛みの定義に基づけば、痛みは感覚と情動の両面から評価することが必要であるが、口腔顔面領域の痛みを抱える更年期の女性においては、家庭や仕事などの心理社会的要因が背景に存在し、その評価は容易ではない。

本セミナーでは、そのような混沌とした背景の中で展開される歯科での難治性疼痛の臨床と、それを単純化した更年期モデル動物を用いた痛みの研究より、特に女性ホルモンとの関連について行動学的知見を紹介する。

※「口の難病」セミナーを兼ねております。

(問い合わせ先: 歯科補綴学第一教室・石垣・内線2946)

「口の難病」セミナーのご案内

日時： 11月 9日(月) 17:00～18:30

場所： F棟2階小会議室

講師： 三品 裕司 先生

(ミシガン大学歯学部生物科学材料学科遺伝発生学研究室 教授)

演題： BMPシグナルは神経堤細胞の分化決定に影響し頭蓋骨融合症の原因となりうる

要旨:我々の研究室は増殖因子BMPの働きに興味を持ち、遺伝子改変マウスを利用して初期胚での体軸決定機構、心臓弁の機能獲得、骨密度の制御機構など幅広く研究を進めている。今回は神経堤細胞におけるBMPシグナルと頭蓋骨融合症との関連について我々の見いだした知見を紹介したい。頭蓋骨融合症は頭蓋をつなぎ合わせる縫合線が早期に消失してしまう疾病で、これにより頭蓋の成長が止まってしまうため、治療せずにおくと頭部の変形、難聴、失明などに至る。原因となる遺伝子変異が確認されているケースは20%程度であり、融合する場所や程度が様々であるため、融合の分子機構は多彩であることが予測される。我々はBMPシグナルが上昇することが頭蓋骨融合症の一因になるのではないかと考え、神経堤特異的にBMPシグナルを上昇させるマウスを作製し、仮説の証明を試みた。これらマウスは前頭縫合の早期融合による頭蓋骨融合症を示した。骨芽細胞特異的にBMPシグナルを上昇させた場合には目立った症状は見られなかったため、BMPの上昇による神経低細胞の機能変化、特に分化決定への影響により、頭蓋骨融合症が引き起こされたものと考えられる。BMPIによって誘起されるSmadシグナルの上昇が確認されたがnon-Smadシグナルは正常レベルのままであった。頭部の異常は(1)内在性のBMPリセプターを1コピー欠損させること、あるいは(2)正常発生を妨げない程度の低容量のSmadシグナルの阻害剤を投与すること、によってほぼ正常に戻すことができた。このことはBMPシグナルのわずかな上昇が頭蓋骨融合症を引き起こすことを示唆している。

※大学院特別講義を兼ねます。 問い合わせ先: (顎顔面口腔矯正学教室 山城 隆・2958)

大学院特別講義のご案内

- ◆ 日時: 2015年11月17日 (火) 17:15~18:45
 - ◆ 場所: D棟3階 示説室
 - ◆ 講師: 小野 高裕 先生(新潟大学大学院医歯学総合研究科 包括歯科補綴学分野教授)
 - ◆ 演題: 咀嚼・嚥下機能とフードサイエンス
-
- 要旨:すでに超高齢社会に突入した我が国の人口はピーク時の約1億3千万人から、今後50年間に約8700万人まで減少するが、逆に高齢者人口率は現在の約27%から40%まで増加されている。介護保険制度で認定された要介護者数は現在約500万人に達しており、摂食嚥下障害を有する者の割合は、各種介護・療養施設において過半数を超えている。このような背景から、医療・介護の現場における摂食嚥下障害への取り組みは、ますます喫緊の課題である。我々歯科医学の領域においても、臨床面における精密化・効率化だけでなく、学際的な研究が必要と考えられる。その一つとして、近年フードサイエンスと顎口腔機能学が融合した学際的な研究領域が成立しつつある。今回は、舌と喉頭の動きに焦点を当てた咀嚼・嚥下機能評価法とフードサイエンスとの融合研究について紹介したい。
 - (問い合わせ先:有床義歯補綴学・高齢者歯科学分野 内線:2954)
 - ※「口の難病」セミナーも兼ねます

大学院特別講義のご案内

日時: 2015年12月11日(金) 13:05～ 14:35

場所: 口腔科学研究棟5F 弓倉記念ホール

International Symposium 2015

Oral and Craniofacial Development and Diseases

First session of Invited lectures

Session Chair: **Satoshi Wakisaka** (Osaka Univ.)

Sachiko Iseki (Tokyo Medical and Dental Univ.)

Teeth of the development, by the morphogenesis, for the future

Han-Sung Jung (Yonsei Univ.)

The molecular mechanisms in tooth development

Atsushi Ohazama (Niigata Univ.)

Regulation of endochondral ossification by transcription factors

Riko Nishimura (Osaka Univ.)

「口の難病」セミナーのご案内



日時: 2015年12月11日(金) 14:55～ 16:25

場所: 口腔科学研究棟5F 弓倉記念ホール

International Symposium 2015

Oral and Craniofacial Development and Diseases

Second session of Invited lectures

Session Chair: **Han-Sung Jung** (Yonsei Univ.)
Riko Nishimura (Osaka Univ.)

Exploration of Salivary Gland and Palatal Development Mechanisms using New Databases for Future Regenerative Medicine

Takayoshi Sakai (Osaka Univ.)

Shh functions in oropharyngeal region

Sachiko Iseki (Tokyo Medical and Dental Univ.)

Dentin Matrix Protein 1: bone biology and clinical application

Satoru Toyosawa (Osaka Univ.)

※「口の難病」セミナーを兼ねております。要旨は「口の難病」プロジェクトURL:<http://www.dent.osaka-u.ac.jp/attached/0000007328.pdf>

(問い合わせ先:「口の難病」プロジェクト・水引・内線2704)

大学院特別講義のご案内

日時: 2015年12月11日(金) 16:35~ 18:05

場所: 口腔科学研究棟5F 弓倉記念ホール

International Symposium 2015

Oral and Craniofacial Development and Diseases

Plenary lectures

Session Chair: **Takashi Yamashiro** (Osaka Univ.)

"Making Faces: The role of Cranial Neural Crest Cells in Neurocristopathies and Ribosomopathies"

Paul Trainor (Stowers Institute for Medical Research)

Craniofacial anomalies account for approximately one-third of congenital defects. The majority of the bone, cartilage, connective and peripheral nerve tissues in the head and face are derived from a transient progenitor cell population called the neural crest. Consequently, defects in neural crest cell patterning are thought to underlie most congenital craniofacial anomalies. Understanding the etiology and pathogenesis of craniofacial malformations therefore is dependent upon a thorough knowledge of the mechanisms that govern neural crest cell formation, migration, survival and differentiation. Ribosome biogenesis is integral to cell growth and proliferation through its roles in translating mRNAs and building proteins. Disruption of any step in the process of ribosome biogenesis can lead to congenital disorders termed ribosomopathies. Given the ribosome's importance in all cell types, it is remarkable that disruptions in the global process of ribosome biogenesis leads to congenital anomalies with specific phenotypes including defects in the craniofacial, axial and limb skeleton. This is exemplified in conditions such as Treacher Collins syndrome and Acrofacial dysostosis, Cincinnati type, which are associated with mutations in TCOF1, POLR1C or POLR1D, and POLR1A respectively. Our research on the etiology and pathogenesis of Treacher Collins syndrome and Acrofacial dysostosis, Cincinnati type, has revealed the critical role of rDNA transcription, one of the rate-limiting steps of ribosome biogenesis, in neural crest cell development. Furthermore, we have determined that the spatiotemporal regulation of rRNA transcription can mechanistically underlie the phenotypic specificity of each ribosomopathy. Thus integrating ribosome biogenesis with regulators of neural crest cell, cartilage and bone development serves growth and differentiation during skeletal development, the perturbation of which results in congenital neurocristopathies and ribosomopathies. Furthermore, our work is facilitating the development of therapeutic approaches to prevent the pathogenesis of craniofacial malformation syndromes, which has broad implications for other congenital birth defects of similar etiology to Treacher Collins syndrome.

※「口の難病」セミナーを兼ねております。

(問い合わせ先: 「口の難病」プロジェクト・水引・内線2704)

「口の難病」セミナー1,2のご案内

日時： 2月 8日(月) 16:00～19:00

場所： F棟5階 弓倉記念ホール

講義1

講師： 出口 徹先生

(オハイオ州立大学歯学部矯正歯科学講座准教授)

演題： “アメリカと日本の矯正歯科事情における違い：デジタル化および教育システムについて Difference in Orthodontic Clinical Situation between United States and Japan: 3D Digital Generation and Educational System”

要旨： 現在アメリカで普及してきている最新鋭の矯正治療システム、口腔内スキャナーの実用化やデジタル化の未来について、アメリカと日本における臨床教育システムの相違などについてお話しいただく予定です。

講義2

講師： Henry W. Fields, DDS, MS, MSD 先生

(オハイオ州立大学歯学部矯正歯科学講座教授)

演題： “Orthodontic Procedures Following Dental Traumatic Injuries”

要旨： This lecture considers oral trauma and its relationship to orthodontics with respect to prevention and primary, secondary, and tertiary care. The level of evidence is not high in regard to this topic, but recommendable approaches to trauma at each stage are discussed on the basis of available literature and published guidelines. Simplified biomechanics are presented to aid treatment.

※1講義につき1単位とします。

※大学院特別講義を兼ねます。

問い合わせ先：(顎顔面口腔矯正学教室 山城 隆・2958)

「口の難病」セミナーのご案内

- ◆ 日時:平成28年3月4日(金) 18:00～20:00
- ◆ 場所:F棟4階 大学院セミナー室
- ◆ 講師:杉本 朋貞先生 (岡山大学大学院医歯薬学総合研究所・教授)
- ◆ 演題:「末梢神経切断によって誘発される体性感覚系の変化」
- ◆ 要旨

外傷や外科手術に伴う末梢神経損傷は、組織損傷自体が侵害刺激となって誘発される侵害受容性疼痛以外にも、様々な神経障害性疼痛を惹起する。今回の大学院授業では、実験動物の末梢神経損傷後に観察される体性感覚系の器質的・機能的変化を紹介し、それら変化の意味を考察する。講義の前半は2015年3月のものとほぼ同様であるが、後半には最近のデータを追加して紹介する。

※本セミナーは大学院特別講義を兼ねております。多数のご参加をお持ちしています。

問い合わせ先:(歯学研究科 口腔解剖学第二教室 内線2877)

口の難病セミナーのご案内

- 日時： 平成28年3月18日(金) 17時00分～18時30分
- 場所： 大阪大学歯学研究科 F棟4階 大学院セミナー室
- 講師： **Nigel Pitts**教授
King's College London(英国)
- 演題： **The need to achieve a Cavity-Free Society in a globalising world – Why and How**
- 要旨： この度、臨床う蝕学研究の第一人者であるPitts教授に、本学でご講演いただく機会を得て、ミネラルの電荷の違いを利用して歯質の再石灰化を促す革新的な治療技術をご紹介いただく予定です。また、IADR (Cariology Group) およびヨーロッパう蝕学会(ORCA)のリーダーとして、旧来の「削って詰める」から「う蝕マネジメント」へ、さらにはカリエスフリー社会の実現を目指した世界的な活動をご紹介します。



※本セミナーは大学院特別講義を兼ねております。多数のご参加をお持ちしています。

問い合わせ先：歯科保存学教室（内線：2927）

「口の難病」セミナーのご案内

日時: 2016年3月18日(金) 17:00～19:00

場所: D棟2階 中会議室

講師: 西野精治先生

Stanford University School of Medicine, Sleep and Circadian Neurobiology Laboratory, 教授
演題: Neurobiology of Hypersomnia: Animal Studies to Bedside (日本語での講義です)

要旨: Our progress in understanding the pathophysiology of hypersomnia is particularly indebted to the 1999 discovery of narcolepsy genes (i.e., hypocretin/orexin receptor and peptide genes) in animals using forward genetic and reverse genetic. These results immediately read to the discovery (in 2000) of hypocretin ligand deficiency in idiopathic cases of human narcolepsy-cataplexy. The discovery in human narcolepsy lead to (A) the establishment of a new diagnostic test (i.e., low CSF hypocretin-1 levels) and (B) development of hypocretin replacements to be used in the treatment of hypocretin deficient narcolepsy.

Hypersomnia also occurs in association of various neurological conditions, including stroke, brain tumors, and neurodegenerative (such as Parkinson's disease) and genetic disorders (such as, myotonic dystrophy, Prader-Willi syndrome), and impairments of hypocretin neurotransmissions are also seen in some of these diseases. However, hypocretin impairments could not explain the pathophysiology of all types of hypersomnias, and other mechanisms still unknown are involved. Research using the animal models of myotonic dystrophy and Parkinson's disease is currently in progress in our laboratory in order to find specific pathophysiological mechanisms involved in hypersomnia in these diseases.

In this talk, the pathophysiological mechanisms of hypersomnia associated with various etiology based on the results of recent animal experiments will be discussed.

※本講義は大学院特別講義を兼ねております。多数のご参加をお待ちしています。

問い合わせ先: 口腔解剖学第二教室(内線: 2877)

口の難病セミナーのご案内

- 日時： 平成28年3月23日(水) 17時00分～18時30分
- 場所： 大阪大学歯学研究科 F棟5階 弓倉記念ホール
- 講師： **Bob ten Cate** 教授

Academy Professor with the Royal Netherlands Academy of Arts and Sciences
Former Head of the Department of Oral Health Sciences at the Academic Centre for Dentistry Amsterdam (ACTA)
Former President of International Association for Dental Research (IADR)

- 演題： **Biofilms, a new target for caries prevention**
- 要旨： う蝕や口腔感染症の予防、とくにフッ素および抗菌薬の作用機序に焦点をあてた研究を行ってこられたten Cate 教授をお迎えして、バイオフィルムを理解することの重要性やバイオフィルム研究に基づく新しいアプローチなど、細菌学的側面からう蝕について解説して頂きます。



※本セミナーは大学院特別講義を兼ねております。多数のご参加をお持ちしています。

問い合わせ先：歯科保存学教室（内線：2927）